OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	コレクション中川2 ： 「ある戦いの記録」から皮肉屋との対話
Author(s)	中川, 雅道
Citation	臨床哲学のメチエ. 2012, 18, p. 35-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23022
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

コレクション中川②

「ある戦いの記録」から皮肉屋との対話

中川雅道

内側からの声

運転手さんに挨拶して、バスから降りる。これから大学に向かい、数名の人たちの話を聞きにいく。急峻な瀬川の坂が立ちはだかり、足を止めた。瞬間、その日に起こってしまったことが、まだ胸の中に燻っていることに気づいた。バイクが後ろから追い抜いていく。小学生がだらだらと正面から歩み寄ってきて、通り過ぎ、背景に消えていく。

「みんなの意見が痛かった」。

この言葉を、学校の保健室で聞いた。授業で、生徒たちが出したテーマで話し合った直後のことだった。わざとなのか偶然なのか、そのテーマはその子ひとりを責めるものだったのだ。そのことに、授業が終わるまで気づくことができなかった。そしてなんと、その日の授業は活発に意見が出て、良い議論だったと思っていたのだ。気づけなかった後悔が、胸の中に溜まってゆく。

目の前で泣いている人。

「みんなの意見が痛かった」。

ちりちりと、ストーブが鳴いている。口から声が出てこない。胸の内で複数の声が併する。——お前がやりたかった対話とはこんなものなのか。—— 違う！おれの力不足なんだ。ほんとうは哲学はもっと深淵にふれるような何かなんだ。—— 現に授業は純粋な悪意に支配され、利用されているじゃないか。こんな授業やめてしまうほうがいいだろう？—— おれが未熟なだけなんだ。やりかたを変えれば、やり方さえ変えれば。—— どこにそのやり方が？

「嫌なことがあったら、授業の途中でも保健室に行ってくれればいいから、無理する必要はないから」と乾いた声が出る。何かについて話すことは、切実な問題を生む。どのような声であっても、人を深く傷つける可能性がある。何度うまくやろうとしても、避けることができない事態だ。重責から生まれる内面の声は執拗に響き続ける。

思い直して、坂を登る。

インタビューの始まり

えっと、それじゃあインタビューを始めます。質問は、いくつかあります。洛星高校の授業に関わるようになった経緯と、関わってから自分に変化があったかを聞きたいと思います。話す順番は適当で！

なぜだろうか、さっきまで響いていた声がいったん収まる。

洛星高校の土曜日の講座で、哲学の授業を行っているメンバーの話を聞きたく

なって、カメラを構えている。自分と似たことを続けている人たちは、授業に向かう中でどんなことを考えているのだろう。そのことが、とにかく聞きたかった。

桂さんとは昨年度、何度かいっしょに授業をした。確か、桂さんを授業へと誘ったのは自分だったような気がする。「誘われたら断らない」という主義を貫いて洛星高校を訪れた。—– 今年度、継続して洛星高校に行ってみて、どんなことが変わりましたか。——臨哲の研究室が嫌いになりましたぁ。

人数はめっちゃ多いのにキホン孤独。けっこう毎回の授業、問題あるんですけど、臨床哲学のメーリングリストで投げても誰からも何にもないし。教育に興味ないひともいると思うけど、なにこれって思う。共有のために、みんなわざわざ時間をかけてメールで流してるのに、まず読んでるのかもわからへんし、読んでたとしたら教育には興味なくても臨床哲学に興味をもって関わっているんなら、おもろいって思えるポイントってあると思う。

確かに、今年度の報告の勢いはすごいですよね。ミーティングの報告まで出してくれるとは思いませんでした。ミーティングや授業に参加できないので、すごく参考になってありがたいですよ、と言ってみたときに、これってみんなのリアリティなんだろうか、と引っかかる。他の方は、このことについてはどう思いますか、とふってみると、桂さんへの質問から話が進む。

研究室が閉じてるってこと ?—– 閉じてるんやったらかわいいんやけど、人がおらへん。—– 肩に手をおきたい……肩がない ! っていうかんじですね。—– 虚空に向かってしゃべってる気がしてくることはありますね。—– おってくれたらそれでいいんやけど。なんかさみしい。—– なるほど、やっぱり周りの人たちの無関心ってリアリティがあるんですね。

そういえば、昨年度に洛星高校の担当者をやっていたとき、同じ悩みに直面していた。情報を共有したい、そして自分の授業がどんなふうに見えるのかを聞きたい。そういうふうに意思表示して、リアクションがなければひどい孤独感を感じる。

そして今、自分が抱えている問題もこの延長線上にある。基本的に、学校の授業はひとりでするもので……そこで起こったことを誰かと共有することが難しい。だから、ひとりで考える。自分の中の皮肉屋が姿を現す。皮肉屋は容赦なく、現実を捉える。彼は言う。つらいならやめてしまえば良いのに。でも、もうひとつの声は、こんな甘いことを言う。そうじゃないだろう、この活動には意味がある。その意味に気づ

いていないだけじゃないのか。

おもろくなる

意味、どこにあるだろうか。それを探しに、ここで、語られる言葉を撮っているのだ。

えー、それじゃあ、次の人、豊泉さんお願いします。——豊泉さんが、洛星高校の授業者に加わることになったのは大阪大学で開講されている授業、対話技法論がきっかけだった。—— 対話技法論で、なんていうか、もう答えが出ているはずなのに、その答えについて質問されることで「分かる」ことがあって、それが気持ちよかったんです。それで洛星に行くようになりました。—— 洛星に行ってみてどんな変化がありましたか。

すごい私的なことなんですけど。親がめっちゃ厳しい人だったんですよ。なに言っても頭ごなしに否定されるっていうか。それであんまり人と話さんくなったんです。自分の言っていることは絶対に理解されへんっていうか。そんなベースがあった中で対話技法論に出て話し合いをしてて、すごい楽しかった。実生活の中で対話ってめっちゃ重要やなって僕は思うんです。

洛星高校での体験が、私的なこととして前置きされた「父と話せないこと」と重ねながら話される。近親者との理解が隠されたストーリーなのだ。—— 対話には技法、ルールがあって、学校で授業をするんやから、そのルールを教えに行くと考えてました。—— でも、ちゃうなって。

洛星に行っている間は、対話の技法を学べば、対話ってできるんじゃないかなって思ってました。でもちゃうなって。お父さんと話し合いがでけへんかったんは、お父さんが対話の技法を知らんかったんじゃなくて、単純に僕が話し合えると思ってた立場がお父さんにとっては全然話し合える立場じゃなかった。対話の場の成立って何なのかなって考え始めました。

対話を実際に行ってみるとは、ただ何かを教えにいくことではない。対話の成立とは互いに話し合える立場をつくることなのだ。

人と人が意見を言うかたちになれば誰でもが対話できるって思ってたんですけど。そうじゃないなって。その人を好きか嫌いかっていうだけで話されへんやんって。そいつのことが嫌いやったら、そういう場があっても話したくないわ、こいつとはって思うし。今は、話したくない人とどうやったら話ができるのかなっていうところに自分の意識が変わった。話している人がおもろかったら、話できるよなって思って。おもろくなるしかないかなって。話すほうがおもろくなったら、聞くほうもちゃんと聞いてくれるかなって。

豊泉さんの変化は、話す条件へと意識が向いたことだ。知らない人へ向けて、知っている人が何かを教えるという教育観から、そうではないところへ。生徒たちが持つ好悪という感情や、語る人がおもろくなることといった、話すものの条件を整えるという見方へと変わっていく。教室で生じるできごとを見る目が変わった。そしておそらく、この変化は豊泉さんの語った、父との対話へのひとつの姿勢なのだろう、あるいは。

そして、この語りを聞いたことで、孤独がひとつ去った。自分の考えていたことが明らかになる感覚を信じて、対話の授業を繰り返してきた。その魅力を語る人が現れた。自分一人ではなかった。そのことが、心を暖める。

シークワーシャーとほっぺたと

今年度に初めて洛星高校の授業を訪れた山本さんは初めての授業が自分には向いてないと思った。―― たぶん生徒がこう言いたいんやろなってことを授業をしに来ている人たちが誰も何も言わない。もっとこう言ったらいいのにっていうのが気持ち悪くて、この授業で何がしたいのかが分からなかった。―― それで、山本さんはしばらく洛星高校には行かなかった。そんな彼が久々に訪れた授業で「シークワーシャージュースは新しいか」が議論されていた。

シークワーシャーの授業が純粋に参加者として面白かった。教える側とかそういうのを抜きにして面白かった。面白いっていう感覚は、こいつこれが分からんかったんやっていうのが、教える側も教えられてる側もわかる瞬間っていうのがあって、それがすげー気持ちいい。このことを経験した後、この子が何を言いたいのかを見るようになった。そのことに真剣に向き合えるようになった。

―― その感覚よくわかります。なぜかは分からないんですが、現代文の授業をしていてもたまにそういう経験をしますね。あの瞬間は何ものにも代え難い。対話の授業でも同じで、みんなが話されている論点の大事さがはっと分かる瞬間があって、その瞬間を味わいたいがために、授業をしてるようなもんですよ。―― ついつい、カメラを持つ手に力が入る。そして、またひとつ、共感することができ、孤独は去っていく。

他の人たちに質問です。これから、やってみたいことってありますか？―― その場で何を話したいのかを出して、それを続けていくことをやってみたいです。先生のほうが生徒のほうにインクルードされていくっていう体験をしてみたい。

この言葉を聞いて、カメラを撮りながら、ある日の授業を思い出していた……

「なぜほっぺたは赤くなるのか」。笑い声がおこる。どうやら、発言した子はよくほっぺたが赤くなって、周りから冷やかされるらしい。「先生、今日はこれでいきましょう!」うーん、この問いで何について話せるんやろか。まぁでも、やりたいのなら、やってみようか。

「いっつもエロいこと考えてるからやろー。」やっぱり冷やかしか。さーて、この空気をどうしたらいいもんか、と考えながらしばらく観察していた。あいかわらず、エローイとか言いながら数名がふざけあっている。何かが引っかかったのか、発言する人が。「でも、ほんまになんでほっぺたって赤くなるんやろ?」真剣な調子で繰り返す。

空気が変わった。「せやなー、まず、どんな時にほっぺたって赤くなる?」と試しに尋ねてみる。「恥ずかしくなったとき!」「失敗して動揺したとき!」「好きな人が近くにいるとき!」—— 心の状態が顔に出るってことなんかな?—— でも、なんで心が出ちゃうんかな。それって隠しときたいもので、動物としては劣ってるよね。—— 心と体はつながってて、だから、不利な感情も人に伝えてしまうんやと思う。—— 隠すことができるときもあるから、やっぱり心と体はつながってないとおれは思うけど。

デカルトさんの登場か、とぼんやり考えていたらチャイムが鳴った。心と体の関係か、おもろいな、まさかほっぺたからここまで辿り着くとは、とつぶやきながら職員室に戻る……。

カメラを構えながら、少し饒舌にしゃべってしまう。—— 生徒の側から出た意見を授業でそのまま扱って、失敗する時もあるけど、うまくいったときのクラスの盛り上がり方はなかなかですよ。ぜひ、来年度から、積極的に試してみてくださいねー。—— 自分の経験から誰かにアドバイスする。

このことでまた一段と孤独は薄れる。

皮肉屋

カメラを片付けかけた時に、またまた例の奴が声をかけてくる、でも。

ところで、そろそろ授業をやめてしまう覚悟はできたかい?—— 残念ながら、君の皮肉の出番はなくなったみたいだぜ。さいなら。